六間もあらうといふ大屋根に飛び上がつた、又もやジッと下手を見まする、と、萬頼は寂として虫の聲も聞へない、シテ遣つたりと仲んの曲者、又もや飛鳥の如くに飛び下りると、豫ねて小蔭に隠くれて居りましたる一人の曲者

「曲」兄上かッ……

×「シー」

「拙」今日首尾能くも、檜司殿の咏ッ……

「拙」様子は何うだッ……

△「拙」者は最前萬藤に出逢ひたるが、其の内と欺はり、其の名も右近太夫公任と變名して、豫ねて作り置きたる勅狀を以て頼義親子を欺むき、愈々明日は都に發足といふ事に相成つたるも、頼義父子は名代の智愚者、假令明日に成ればとて、容易く歸國するものとも覺へず、既に今日拙者より先きに入り込んだる妹萬藤も、既に前刻より當所の要害を取調へ、十分用意いたし居れば、叔父上にも、早やく寢所の方へ赴かれよッ……

△「フム……」如何にも其方のいふ通り、頼義父子は迚ても其の手に乘る者にあらず、畢竟汝等兩人を此の陣屋に入り込ませたるも、内部の要害を調べん爲めなり、シテ〳〵萬藤

は如何いたしたるぞ

「拙」者は最前萬藤に出逢ひたるが、其の節萬藤の申するには、頼義も去る者なれば、若し少しにても勅使の次第を疑ふ時は、却つて一層用心して、床に入るといふ事はあるまい、依つて是れより自分が一應樣子を伺ひ、此處まで出て來るといふ事でございまする

×「フム……」其れもよし、然し相手も名代の頼義義家、必らず不覺を取るでないぞッ……」互つて、義家の情けに依りて當陣屋へ入り込んだる折梅と云へるは、實は、敵方の廻し者、女でこそあれ無類の大力、安倍家の一族、安倍頼行の妹、則ち本日右近太夫公任と變名して勅使と欺はつたる安倍信任の妻萬藤といふ美人でございまする、今も御廊下傳ひに頼義公の御居間眞近く相成りまするとシーッと中の樣子を伺ふて居りましたが

「萬」申し上げまする……申し上げまする、今日御救けを蒙むりましたる折梅と申する者にご

ざいまする、日頃の御疲労、幸ひ御湯の沸りましたれば御召なれば差上げませうやッ……」一向返事がない、折梅の萬萬は、スレッ……と襖を開けて見ると、短冊の蔭暗らく大將軍頼義朝臣は、グーッ……グッと云つて寢入つて居る　折君様には御目醒め遊ばしませッ……」如何にも能く寢入つて居りまする、嬉かて返事の無いのを機會にスーッと御居間を立ち出でまするとゝ、豫ねて又もや今度は太郎義家の御居間をさして進んで參りまする此處でも以前の如くに聲をかけましたが、定めて些の疲勞が出たものと見へまして中々起きそうな模様がない、折梅の萬萬は仕濟ましたりッと思ひけん、拔き足さし足、合圖のいたしてありまする信行との出合ひの場所をさして進つて參る、今しも向ふを見まするとゝ見さす頼行は、首尾能く忍び込みましたる處の、賊軍の惣大將安倍貞任と、何にか頻りに話しの最中でございまする、時こそ能けれッ……と段々近付く足足より、二

人の兵卒前後に現はれ　兩人「曲者ッ……」聲の下よりムンズとばかり組み付いたり、南無三見付けられては一大事と、今や前より組み付いたる一人を、利腕取つて、エイッ……モンドリ打つて投げ付ける、起しも立てず懐中より取り出したる一刀は、鞘を走しつて一人の首を前に斬つて落とす、餘りの事に後ろの一人、コワ叶はじと逃んとするを、其れ逃がしてはッと、駆け寄る萬萬、後ろ袈裟に、ヤ聲と共に斬り捨てたり　萬「兄上様に君が夫様、其れにお出でゝございまするか　頼行「フム……流石は萬萬、何時もながらの其方の手の中感じ入つたり、大事を知られては何彼の妨げ、シテ大將の模様は如何であるぞ　萬「素より頼義父子の事ゆへ、虚實の程は分かりませんが、正さに寢入り居るものと心得まする、首尾は上々、早やく御出で遊ばしますれば、萬萬御案内仕つりまする　頼「フウ……萬萬ならでは是れまでには參らぬ手柄、何づれ褒美は追つての事、先づ其れ

よりも案内ないたせ　萬「心得ましてございまする　貞「シテ其の方夫婦は頼義の首級を斷れ、拙者は太郎義家を殺さん、素より頼義も名代の大將には相違なけれども、義家さへなくば、奥州の安倍家は萬代不易、決して失策るでないぞッ……　兩人「心得ました　萬「心得ましたる三人は、右と左りに分して候」　萬「事の打合せをいたしまする、素より十分準備の整ふて居りまする事ですから、今や萬壽と信任は頼義の居間、貞任は義家の居間をさして進つかれまする、能く芝居でいたします奥州安達ヶ原三段目、て參ります、安倍貞任は、櫃中納言と成つて義家の陣屋に入り込む、遂に見現はされましたが義家の情けに依つて、其の儘見逃がされる處がございますが、彼アいふ事は決してありそうな筈がない、古い書籍なぞを調べて見ますると、貞任は其の丈け九尺に餘ま り、腰の廻はり七尺を越へたとある、ヨシ其れ程でなくとも兎も角も圖抜けて大きい男であつたのでございます、殊に數度の

戰場にて顔を合はして居りますから、貞任であつたら一度に見現はされるといふ事に位ひは貞任も知つて居ります、彼れは後年狂言作者に依つて面白可笑しく作つたのでございます、本年當地中座劇場にて實川延二郎が實錄として演じましたのも、吾れ〳〵の方とは多少趣きが違つて居りますが、殆んど大同小異でございます、此處に安倍貞任に於きましては、鱸がて萬壽の案内に依りまして、廊下と申しましても、ホンの假屋でございますから、粗末なものではあるけれども、何んしろ鎮守府將軍の御本陣、華く者色を立てさせじと、一足引つては踏み止まり、二足歩んでは呼吸をつぎ、漸々の事に、義家の御居間眞近くまりまするとと、殿居の者と見へまして、前後不覺に眠入つて居る、起きられては一大事と、右手に廻はつて行こうとするけれども、何を云つても、見上ぐるばかりの大の男でございます、短啓の燈火りを便よる一歩二歩、ハーッ……と思つたが運

の盤き、片邊に眠て居りまする殿居の兵士の足を踏んだから堪りません　兵「己れッ……」起き上がらんとする處を、聲立てさせじと、拔き討ちに、ズバーリッ……其處に切つて落し、ホッと一呼吸つきながら、タッ〳〵と後ろに下つて目や醒めつらんと伺ふ處、天の與へか白河の夜舟をたどる太郎義家、グーッ……グッといふ高鼾にシテ遣つたりと又もや忍ぶ足がきの、己れ義家唯一討ちと、今や義家朝臣の枕元にスックとばかり立ち上がり、貞「卑怯には似たれども、八幡太郎義家、安倍二郎太夫貞任が汝ちの寢首を貰つた覺悟せよッ……」と口の中、金銀まばゆき三尺有餘の軍刀を大上段にふりかぶる、累卵の淵か油を持つて火中に望むの其の危うさ　貞「エーッ……」大喝一聲、根太も通れッ……と貞任は、義家の首級を望んで切つて落とす、アナヤッ……と思ふ一刹那、荒海渡たる燕、目にも留まらず四五尺ばかり飛び除いて、御刀掛の佩刀を取るより、仁王立ちにと立

ち上がつたる八幡太郎、大音上に　義「ヤア〳〵者共出て逢へ、曲者忍び入つたるぞッ」オヽと答へて出て來たるは、豫ねて斯くやあらん、御下知今やと待ち搆へたるは、是れぞ義家の郎黨中、勇力隨一と云はれたる坂戸の判官則明なり　則「ヤア〳〵慥かに承まはれ、吾れこそは八幡太郎義家朝臣の郎黨にて坂戸判官則明なるぞ、賊將安倍貞任、相手に取つて不足なし、汝先刻當柵内に忍び入つたる事は、以前より承知いたしたり、恐れ多くも王師に逆ふ大賊臣、忠義の切先き受けられるなら受けて見よッ……」南無三寶、扨てこそ狸寢入りであつたるかと、流石の貞任一端は驚きましたが、素より豪勇無双、大音上げて　貞「アハッ……事も可笑しや坂戸判官、最早や斯く現はるゝ上は是非もなし、吾が父頼時は源頼義父子の爲めに亡ぼされ、其の讐敵を討たんが爲め、義頼父子を覘ふたり、サア汝等如き蟇虫等に、奥州第一の安倍貞任が討ち取れるものなら取つて見よッ、

坂「オヽ云ふにや及ぶッ……」と同じく刀渡たり二尺七八寸、ズラリ抜いたる坂戸則明、此處に愈々龍闘虎搏の大佳境、といふ一席如何相成りまするや、殘念ながら紙數に限りがございまして本編は一先づ此の邊にて御免を蒙むり、愈々第二編安倍貞任を以て引續いて申し上げる事にいたしませう、時に康平五年神無月、處も奥州衣川城の大激戰より、遂に敵將の討死、衣川城の火攻めから、安倍宗任義に依つて義家に服從する、大江匡房の直言から、義家朝臣の風流といふ、讀み去り讀み來たれば、本編の如きは、實に肉湧き、血躍ごるといふ、前九年より後三年の役に至る一節は、まだ〳〵是れからでございますれば、後編出でまする節には、相變らず本編同樣の御愛讀を願ひたく書畢の主人と共に此處に懇願いたして置きまする、扨て後編の表題は、

豪勇安部の貞任

と書き現はしまする、何うか御記臆を願つて置きます、永々御退屈樣……

名將

八幡太郎源義家（終）

明治四十四年九月廿五日印刷
明治四十四年十月一日發行

口演者　玉田玉秀齊

發行者　岡本三郎
大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番地

印刷者　南谷新七
大阪市西區北堀江下通一丁目六番地

八幡太郎
奥附

不許複製

發行所　岡本偉業館
大阪市東區北久太郎町四丁目心齋橋筋東入
電話東二一八七番　振替大阪二九九一番

明治四十四年九月廿五日印刷
明治四十四年十月一日發行

口演者　玉田玉秀齊

發行者　岡本三郎
大阪市東區北久太郎町四丁目五十一番地

印刷者　南谷新七
大阪市西區北堀江下通一丁目六番地

發行所　岡本偉業館
大阪市東區北久太郎町四丁目心齋橋筋東入
電話東二一八七番　振替大阪二九九一番

八幡太郎
附與
不許複製

岡本偉業館發行講談小說書目

大阪東區北久太郎町四丁目

（其之一）

西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳一	里見伏姫
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳二	犬塚信乃
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳三	犬川莊助
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳四	犬飼現八
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳五	犬田小文吾
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳六	犬坂毛野
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳七	犬山道節
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳八	犬村大角
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳九	犬江親兵衛
西尾魯山口演	井下士青速記	講談里見八犬傳十	八犬士勢揃
西尾魯山口演	井下士青速記	眞田三代記	眞田幸村
西尾魯山口演	井下士青速記	眞田三代記	眞田昌幸
西尾魯山口演	井下士青速記	眞田三代記	眞田大助
西尾魯山口演	井下士青速記	大岡政談	白子屋騷動
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	いかるが平次
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	後の斑鳩平次
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	其後の斑鳩平次
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	最後の斑鳩平次
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	高浪八郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	後の高浪八郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	其後の高浪八郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	最後の高浪八郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	千葉喜太郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	俠客	後の千葉喜太郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	俠客	最後千葉喜太郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	後藤又一郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	後藤後日の仇討
廣澤虎吉口演	井下士青速記	女俠	軍神廣瀨中佐
廣澤虎吉口演	井下士青速記	勇武	櫻木お蝶
廣澤虎吉口演	井下士青速記	勇武	岩見重太郎
廣澤虎吉口演	井下士青速記	後岩見編	敵討天の橋立
廣澤虎吉口演	井下士青速記	敵討	天下茶屋
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	宮本左門之助
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	望月延之助
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	後の望月延之助
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	最後望月延之助
廣澤虎吉口演	井下士青速記	豪傑	最後の斑鳩平次

- 玉川お芳　井下士鶴治口演　俠女　旭堂南陵口述記　寶説　大石内藏助
- 後の玉川お芳　井下士鶴治口演　俠女　旭堂南陵口述記　氏襲　佐倉宗五郎
- 最後の玉川お芳　井下士鶴治口演　俠女　旭堂南陵口述記　客俠　日本左衛門
- 肥後お辰　井下士鶴治口演　瀧玉編川　旭堂南陵口述記　衛武　阿部豐後守
- 焚出喜三郎　井下士鶴治口演　俠客　旭堂南陵口述記　阪大　御堂前の仇討
- 曙源太　井下士鶴治口演　後焚編出　玉廼家雀燕口演　山田都一郎口述記　豪傑　鞍馬大助
- 幻長兵衛　井下士鶴治口演　後焚編出　玉廼家雀燕口演　山田都一郎口述記　豪傑安　篠塚小太郎
- 片腕喜三郎　井下士鶴治口演　後焚編出　廣澤富昇口演　山田都一郎口述記　武俠　根來半藏
- 唐犬權兵衛　井下士鶴治口演　俠客　廣澤富昇口演　山田都一郎口述記　俠武　根來三十六番斬
- 關口彌太郎　井下士鶴治口演　豪傑　玉田玉鳳口演　山田都一郎口述記　俠客　野狐三次
- 大鹽平八郎　井下士鶴治口演　天保醜動　玉田玉鳳口演　山田都一郎口述記　名工　左り甚五郎
- 齋藤大八郎　山田都一郎口述記　俠客　玉田玉鳳口演　山田都一郎口述記　毒婦　鐘馗半兵衛
- 北條太郎　山田都一郎口述記　大評定川掛評定川　玉田玉鳳口演　山田都一郎口述記　婦毒　霞のお千代
- 荒尾秀丸　井下士鶴治口演　伊賀越仇討後日譚　玉田玉鳳口演　山田都一郎口述記　醜動　有馬猫退治
- 鬼面山谷五郎　京山小圓口演　清水次郎長大政小政　山田都一郎口述記　豪傑　小野川喜三郎　後有馬猫退
- 塚原卜傳　宮本松三郎口演　旭堂小南陵口述記　武術　廣澤虎吉口演　井下士鶴力　雷電爲右衛門
- 奴の小萬　山田都一郎口述記　旭堂小南陵口述記　俠女　廣澤虎吉口演　山田都一郎口述記　豪傑　久田新十郎
- 水戸黄門漫遊記　山田都一郎口述記　旭堂小南陵口述記　政仁　神田伯鱗口演　中村兵藏校訂　講談　三莊太夫

- 稲葉武勇傳　石川一口南洋述記　豪傑　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　豪傑　蟹江才藏
- 稲葉白雲　石川一口南洋述記　豪傑　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　豪傑　後の蟹江才藏
- 烈婦みち子姫　石川一口南洋述記　後稲葉編　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　豪傑　最後の蟹江才藏
- 宮本武藏　丸山平次郎述記　勇武　石川一口口演　後宮本編　山田唯夫速記　豪傑　粂の平内
- 豐前島大仇討　三宅社一馬口演　後島七編　石川一口口演　後宮本編　山田唯夫速記　豪傑　後の粂の平内
- 團七九郎兵衛　三宅社一馬口演　後島七編　樓橋貞二速記　俠客　山田唯夫速記　豪傑　最後の粂の平内
- 一寸徳兵衛　樓橋貞二速記　後島七編　尾崎東海口演　山田都一郎速記　建久美談　山田唯夫速記　豪傑　粂の鐵扇齋
- 我物語　尾崎東海口演　山田都一郎速記　建久美談　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　豪傑　鷲津新六郎
- 毛谷村六助　尾崎東海口演　山田都一郎速記　一勇武　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　豪傑　鷲津武勇傳
- 勇婦板額　山田都一郎速記　尾崎東海口演　双無　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　豪傑　八幡太郎
- 佐野鹿十郎　新流齋一洗口演　森本宇吉速記　勇武　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　豪傑　阿倍の貞任
- 鎗持勘助　田邊南鱗口演　高島政之助速記　義俠　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　豪傑　阿倍の宗任
- 海坊主お龍　又新日報記敍　夢柳庵主口演　怪談　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　東叡山大仇討　結城武勇傳
- 後の海坊主お龍　又新日報記敍　夢柳庵主口演　怪談　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　婦勇　結城萩野
- 全盛吾妻太夫　又新日報記敍　夢柳庵主口演　白鞘組小櫻組　吾妻太夫　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　勇の雲　東叡山大仇討
- 後日の怪談　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　四ッ谷怪談　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　小夜の中山大仇討
- 民谷伊右衛門　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　民谷編　玉田玉秀齋口演　山田唯夫速記　小夜の中山　夜泣石の由來
- お岩の亡靈　玉田玉秀齋口演　樋口南洋述記　後民谷編　松廼家翠口演　馬場三郎述記　義士外傳　片山萬藏

267
279

岡本偉業館發行講談小說書目

大阪東區北久太郎町四丁目

（其ノ四）

月の舍美華 口演 武術の奥 佐久間三郎 神田伯龍口演 丸山平次郎速記 仇討 横谷權之助

月の舍美華 口演 豪傑 無刀の佐久間 神田伯龍口演 丸山平次郎速記 探偵 三千圓の米櫃

月亭露玉口演 涙花速記合筆記 男一匹 男中の男 此花金次 山崎琴書口演 井下士青速記 講談探偵 双子美人

月亭露玉口演 涙花速記合筆記 義侠の助太刀 向島血染の櫻 井下士青速記 講談探偵 鬼車

桃川燕林口演 今村次郎速記 笹野武勇傳 山崎琴書口演 井下士青速記 講談探偵 湊大助

桃川燕林口演 今村次郎速記 後編 笹野勇婦お梅 多田省軒作 奇談探偵 急行列車

桃川燕林口演 今村次郎速記 後編 笹野仇討 柳川大 多田省軒作 奇談探偵 暗夜の血漿 副編

神田伯龍口演 魁西多三郎速記 客侠 嵐山花五郎 多田省軒作 奇談探偵 暗夜の血漿 後編

神田伯龍口演 魁西多三郎速記 後編 嵐山 西海屋騒動 佐藤義太郎著 慘風悲雨 世路日記合本

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 名勤王士 高山彦九郎 各一冊 正價金拾八錢 郵税四錢

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 勤王名士 高山彦九郎 後編 ▲▲▲涙香小說▼▼▼

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 豪傑 稲生武太夫 涙香小史譯述 探偵小說 指環（上卷）

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 後編 稲生寶暦三豪傑 涙香小史譯述 探偵小說 指環（下卷）

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 勇武 荒木又右衛門 涙香小史譯述 探偵小說 美人の獄

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 後編 荒木 伊賀越大仇討 涙香小史譯述 探偵小說 大盜賊

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 騒動 檜山作 相馬大 涙香小史譯述 探偵小說 眞暗（上卷）

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 仇討 清原家大騒動 涙香小史譯述 探偵小說 眞暗（下卷）

神田伯龍口演 丸山平次郎速記 當世三人娘 秋月照子 各一冊 正價金弐拾五錢 税郵四錢

大阪四方偉業館發行